

博士学位論文審査要旨

申請者 中野綾子

論文題目 アジア・太平洋戦争期における戦場での読書行為についての研究

申請学位 博士（学術）

審査委員

主査 和田敦彦 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

副査 石原千秋 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

紅野謙介 日本大学文理学部教授

千葉俊二 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

1 本論文の目的と構成

本論文は、アジア・太平洋戦争期における読書行為について、主として戦場での将兵（特に学徒兵）をとりまく読書環境に焦点をあてつつ調査、分析を行った研究である。戦地への書物の流通や、慰問用出版物の刊行、戦時下の読書運動等を視野に入れながら、戦場という読書の間が生まれていく過程を明らかにしている。さらには、戦場での多様な読書行為が、戦後、イメージとして変容していく過程をとらえている。全体は三部構成となっており、目次は以下の通りである。

序章 本研究の目的と方法

第一節 本研究の目的

第二節 先行研究概観と資料状況

第三節 将兵という読者を設定する意義

第四節 学徒兵という読者の受容

第五節 論文構成

第一部 戦場での読書行為

第一章 書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為

第一節 戦前外地の出版流通

第二節 日本出版配給株式会社の外地進出

第三節 通常販売以外による書物の多様な入手方法

第二章 戦時下の慰問出版文化一定着とその役割

第一節 慰問用書物の組織的発送による定着

第二節 文学者による「前線文庫」活動

第三節 慰問用書物の商品価値

- 第四節 『陣中倶楽部』と『兵隊』
- 第五節 戦場における読者層
- 第三章 〈緩やかな動員〉のためのメディア ―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐる―
 - 第一節 『兵隊』の読者層
 - 第三節 『兵隊』における「インテリ兵」イメージ
 - 第四節 「兵隊」として書くこと
 - 第五節 兵隊作家モデルとしての火野葦平
 - 第六節 兵隊から作家へ―執筆者の変容―

- 第二部 戦時下、国内の出版統制
 - 第四章 〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度 ―文部省と日本出版文化協会―
 - 第一節 文部省推薦図書制度の成立と拡大
 - 第二節 推薦図書制度への批判
 - 第三節 日本出版文化協会による推薦図書制度
 - 第四節 〈緩やかな統制〉としての「良書」推薦
 - 第五章 戦時下学生の読書行為 ―戦場と読書が結びつくとき―
 - 第一節 推薦図書制度という出版統制
 - 第二節 学生読書へのまなざし
 - 第三節 戦場と読書が結びつくとき
 - 第四節 武器としての読書行為
 - 第六章 戦時下学生の読書法 ―木村久夫を例として―
 - 第一節 旧制高校生の読書事例として
 - 第二節 推薦図書制度とのかかわり
 - 第三節 出版統制はどう作用したか
 - 第四節 文学表現とのつながり
 - 第五節 大阪陸軍病院への書物持ち込み
付・木村久夫文庫蔵書目録

- 第三部 学徒兵という読者の変容
 - 第七章 「遺稿集文化」を描く ―太宰治「散華」論―
 - 第一節 「散華」における書く青年
 - 第二節 『新若人』における読み／書きの推奨
 - 第三節 結核から戦場へ
 - 第四節 遺稿を編むことへの違和
 - 第八章 堀辰雄ブームの検証 ―学徒兵の読書行為と愛読者批判の構造―
 - 第一節 堀辰雄ブーム下の出版

第二節 特権的読者としての学徒兵

第三節 堀辰雄愛読者に対する批判力学

第九章 学徒兵の読書行為を描く —阿川弘之『雲の墓標』論—

第一節 学徒兵遺稿集の読書統計 —敗戦後から五〇年代まで—

第二節 遺稿集に記された読書 —『きけわだみつのこえ』と『雲ながるる果てに』—

第三節 吉野次郎と『雲ながるる果てに』の読書の共通点

第四節 吉野次郎の荒廃した読書

第五節 藤倉晶の「反戦的」な読書

終章 本研究の成果と課題

2 論文の概要

まず、序章では本論文の目的と方法について述べている。本論文の目的は、アジア・太平洋戦争期における読書行為について調査し、戦場での将兵（特に学徒兵）の読書行為を明らかにしていくことである。戦地への書物の流通や慰問用の出版物の刊行、戦時下の読書運動などを手掛かりに、戦場での読書行為が生まれていく過程をとらえている。さらには、戦後、「学徒兵という読者」が、社会的・文化的に受容されていくまでの過程について分析をおこなっている。こうした考察から、戦中戦後における読書の歴史的な変容をとらえなおすことを試みた。

戦場では読書が厳しく禁じられていたというようなイメージがあるが、それは『きけわだみつのこえ』（東京大学協同組合出版部、一九四九年一〇月）をはじめとする遺稿集・手記などの影響が大きい。軍隊で隠れながら読書を行う学徒兵の姿がそこにはあり、戦場では読書を行うことができない場合も数多くあったといえる。だが、読書は、決して全面的に禁止されていたわけではなく、戦場に流通した書物や読書体験も記録として多く遺されている。本論文の課題は、戦場を〈読書空間〉としてとらえることによって、まずはただ厳密に読書が禁止されていたわけではない、戦場での読書行為をとりまく状況を輻輳的に描き出していくところにある。

また将兵という読者を設定することは、戦地で読まれた書物や、それら書物と文学的営為との関わりをとらえていくことにもつながる。さらには戦争体験の描き方や記録の仕方にも関わる問題である。文学に描かれた兵士たちの読書や遺稿集によって作り出されてきた戦場での読書像と、実際の戦場での読書行為との違いを検証し、その違いの意味を検討することが可能となる。こうした検討を積み重ねることによって、戦後、なぜ戦場という〈読書空間〉のイメージが固定化されてきたのか、その歴史的な変容の力学についても同時に明らかにしていく。

こうした問題意識に立って、本論文では、第一に読書・読者研究において、将兵を読者として新たに設定し、戦中戦後を分断するのではなく、連続したものとして分析する視点

を提示すること、第二に、将兵という読者を足掛かりとすることによって、歴史的・空間的に変容していく読書行為のあり方を視座とした、文学研究の方法を模索していくことをねらいとした。ただし、本研究段階では、資料的制約から学徒兵という読者を中心に考察を行っていることを断っておきたい。

そのための研究方法として、本論文では次の三つのプロセスを中心に研究を進めている。書物が戦場の読者に至るまでのプロセス、書物を将兵という読者が読むプロセス、そしてそこで生まれた将兵という読者が、戦後、イメージとして受容されていくプロセスである。これら三つのプロセスの分析をふまえて、戦場という〈読書空間〉を考察する。具体的には以降、九章を通しての考察となる。以下、各章の内容に即して述べていく。

第一部 戦場での読書行為

第一部では、戦場での実際の読書行為に焦点をあて、戦場への書物の流通状況や兵士に向けて作られた慰問用の書物の出版状況、そして慰問用書物の兵士による受容について分析を行っている。こうした分析から、戦場が〈読書空間〉としてどのように成立し、どのような書物が読まれていたのかを明らかにしている。

第一章「書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為」では、出版業者による戦場への書物の流通網がどのように拡大し、将兵がいかにして書物を入手していたのか、その方法について俯瞰的にとらえることを試みた。まずは、どのようにして戦地に書物が運ばれていき、流通範囲が拡大していったのか、東京堂や大阪屋号書店などの取次店、そして一九四〇年以降の日本出版配給株式会社による外地への書物流通の状況から明らかにした。ただし、戦場へと流通する書物は、こうした取次一小売店ルートを伴わない場合が多い。そこで、雑誌・新聞等の記事や将兵による日記から、一一通りの戦場での書物の入手方法を明らかにした。また、こうした分析の中から、戦場における読書行為をとらえていく際に、戦場で「読める書物」と戦場で「読めない書物」、また「軍や内地の人々が読んで欲しいと望んでいた書物」と「将兵が読みたいと望んでいた書物」の四つのベクトルを考えることが必要であると論じている。

第二章「戦時下の慰問出版文化 一定着とその役割」では、書物が慰問品として戦地へと送られるようになった過程、またそこで制作されていた慰問雑誌について具体的な雑誌を挙げながら明らかにしている。まずは、軍人援護を担った恤兵部を介した各種軍事援護団体等による慰問活動から、民間で書物を戦地へ送るといった慰問活動が根付いていく過程を考察した。とくに、木村毅の主導した文学者による「前線文庫」の活動を取り上げ、なぜこうした活動が行われたのか、第一次世界大戦や第二次世界大戦における諸外国の書物による慰問活動を考察することで、「前線文庫」を企画した木村毅の戦略について考察している。さらに、こうした慰問品としての戦地への書物発送が定着することで登場した、出版社による慰問雑誌の刊行に注目し、慰問活動と商業活動が接続することで生み出された慰問出版文化の特徴について明らかにしている。

また、こうした慰問出版文化が生じた背景について、慰問雑誌の例として陸軍によって制作された兵士用の雑誌である『兵隊』と『陣中倶楽部』の二誌を取り上げて論じている。陸軍恤兵部の要請により、大日本雄弁会講談社が編集した『陣中倶楽部』と、火野葦平を初代編集長とし、陸軍報道部員によって広東で編集・印刷が行われた『兵隊』という二つの雑誌は、一九三九年五月一日に揃って刊行されたが、内容には大きな差が認められる。この二誌の紙面内容を比較することで、大衆的な読者を中心とした『陣中倶楽部』から、より高いリテラシーを持つ読者を中心とした『兵隊』というように、二誌によって多くの兵士を読者として取り込むことが可能となっていたことを明らかにしている。そして、二誌が軍における兵士の教育装置として戦地での読書行為が認められていたことなど、慰問雑誌の役割について検討を行った。

第三章「〈緩やかな動員〉のためのメディア ―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐって―」は、第二章で扱った雑誌『兵隊』における兵士による投稿を分析している。『兵隊』は、兵士によって編集が行われた兵士のための投稿雑誌であり、戦場での読書行為だけではなく、執筆行為をも推奨した雑誌である。これまでに『兵隊』は、兵士の声を記録した自由な投稿雑誌であることが評価されてきたが、戦地で編集された雑誌として、検閲や自主規制の問題を軽視することはできない。そこで、『兵隊』に掲載された投稿作品を分析することで、兵士が自由に読み、そして書く場所を提供しながらも、兵士の意識を緩やかに戦争に動員することとなった『兵隊』のメディアとしての特徴を明らかにした。初代編集長である火野葦平をモデルケースとし、「兵隊作家」として活躍する道を示すことによって、強制的ではないかたちで、緩やかに戦争へと向かわせていく兵士を取り巻く雑誌の仕組みがあったことについて論じている。

第二部 戦時下、国内の出版文化と読書

第二部では、戦時下の出版統制と読書の関係を考察していくことで、内地において戦場と読書が結びついていく過程を問題化している。第一部で明らかにしてきた戦場という〈読書空間〉が、その時期の内地の読書をめぐる運動と結びついていたことを、推薦図書制度や出版統制を視座としながら論じている。

第四章「〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度 ―文部省と日本出版文化協会―」では、文部省と日本出版文化協会によって行われた推薦図書制度を考察した。戦時下の言論統制は、執筆者や出版社に対する検閲が注目されてきたが、そうした統制だけではなく、出版流通や読書行為に対する制約もまた、一種の統制として機能していく。第四章では、推薦図書制度の基礎を作った文部省の推薦図書制度の成立過程を追い、戦時下の出版を一元的に管理するために立ち上げられた日本出版文化協会によって行われた活動のひとつである推薦図書制度の仕組みの分析を試みる。それによって、戦時下の出版統制と読書統制が、その時々によって意味を変えていく「良書」を推薦するということによって、〈緩やかな統制〉としての側面を持っていたことを明らかにしている。

第五章「戦時下学生の読書行為 ―戦場と読書が結びつくとき―」では、前章での日本出版文化協会による〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度が、戦時下の学生の読書に与えた影響について検証を行っている。そして、出版業界紙や大学新聞から、一九四三年以降の学徒出陣期の、戦場での学徒兵の読書に関する記事を考察することで、出版統制のもと戦場と読書とが接続していく様子を明らかにしていく。また、戦時下の学生と読書をめぐる言説からは、戦後に戦争に対する非協力的な態度としてとらえられてきた戦場での読書行為が、戦場において戦意を高揚させるための行為としてとらえられていたことも判明する。

第六章「戦時下学生の読書法 ―木村久夫を例として―」では、戦時下の学生の読書のケーススタディとして、B級戦犯としてチャンギー刑務所にて処刑された木村久夫の蔵書を取り上げる。木村久夫の「遺書」はこれまで『新版きけわだつみのこえ』（岩波文庫、一九九五年）に掲載されたものみとされてきたが、二〇一四年四月二九日『東京新聞』によって、もう一つの「遺書」の存在が公表されたことで、これまでの「遺書」が、二つの「遺書」を組み合わせることで作成されていたことが明らかになっている。その木村の二つの「遺書」によって、高知高等学校と京都帝国大学生時代に購入した木村久夫の四六四冊の蔵書が、高知大学へと寄贈されている。蔵書には、購入日や購入場所、読後感想が記されており、そこからは出版統制下の学生生活から入営直後の陸軍病院での木村の読書の様子を立体的に再現することが可能である。第六章では、木村の蔵書リストと書き込み一覧を作成するとともに、第四・五章にて考察を行ってきた推薦図書制度や出版統制が、実際に学生にどのような影響を与えていたのかをとらえ、ある地方学生が上京し、そして戦地へ赴くまでの読書の変遷を考察している。

第三部 学徒兵という読者の変容

第三部「学徒兵という読者の変容」では、第一部、第二部で論じてきたことを受け、「学徒兵という読者」が社会的・文化的に受容されていく過程と、そこに作用した要因について検討している。そのなかで、第一部や第二部において明らかにしてきた戦場の〈読書空間〉における学徒兵の読書行為のイメージが、戦後の読書ブームのなかで、戦争に対する非協力的な態度として固定化してとらえられてきた要因を歴史的に明らかにする。

第七章「『遺稿集文化』を描く ―太宰治「散華」論―」では、アッツ島での学徒兵の特攻とその死を描いた太宰治「散華」（『新若人』一九四四年三月）をとりあげる。なぜなら、学徒兵という読者表象が戦後に流通するに際し、大きな役割を担うこととなった学徒兵遺稿集（とくに『きけわだつみのこえ』）が現在も抱え続ける、学徒兵の手記を編集する（改ざんする）ということの問題性を、「散華」が描き出しているからである。

これまでに「散華」は「青年」表象に着目した分析は行われているものの、その青年たちが読み／書く青年であることまでは注目されてはこなかった。そこで第七章では、「散華」が掲載された学生向けの報国雑誌『新若人』誌面における読み／書く青年の表象を分析す

ることで、「散華」が当時の読み／書く青年の文化変容をとらえていることを明らかにしている。さらに、「散華」において夭折する二人の青年には、遺稿を編むという点で対照的な点が見出せる。そこからは、夭折した青年の作品を遺稿集として刊行する「遺稿集文化」のモードが、結核による夭折から戦争による夭折へと戦時期に変容していく様子を看取することができる。また「散華」には、遺稿の編集に対する違和も描かれており、戦時下において遺稿集を編集するという出版営為のモードの変容と編集過程を可視化した小説としてとらえなおすことができる。

第八章「堀辰雄ブームの検証 ―学徒兵の読書行為と愛読者批判の力学―」では、『きけわだつみのこえ』の刊行と平行に起こっていた戦後の堀辰雄ブームについて、学徒兵の読書行為との関係から考察を行っている。「学徒兵という読者」が、実際の学徒兵の読書行為ではなく、学徒兵の手記を編集した学徒兵遺稿集の影響で、戦争に対する非協力的な態度として典型化され、受容されていくことで生じた文学状況を論じたものである。

戦後、学徒兵が堀辰雄を読むという行為は、戦争に対して非協力的な態度を示すためのものとしてとらえられ、堀辰雄評価の高まりとともに、堀辰雄ブームが生じている。しかし、兵士の手記に遺された堀辰雄への言及からは、兵士の中での自身の優越性を示すために堀辰雄が読まれていたことが分かってくる。

また、このブーム下の堀辰雄愛読者たちは、中村真一郎や福永武彦、加藤周一などの堀辰雄周辺の作家たちによって、堀辰雄作品を「真に」理解していないと批判されていく。これら作家たちの批判は、学徒兵が戦場で他の兵士たちと異なっているという優越性を示すために行っていた読書行為を領有したものであり、批判を行う堀辰雄周辺の作家たちこそが、戦時下において反戦的な読者であったことを示そうとする行為でもあったという点を論じている。さらに堀辰雄は、生死の境にある学徒兵の読書行為との関連のなかで「生」や「死」という言葉で語られていくが、徐々に実際の学徒兵という読者を示すことなく作家やテキストの普遍性が評価されることになる。そこから、学徒兵の読書行為が典型化されていく背景に、『きけわだつみのこえ』による学徒兵表象の流通に乗じた「文学」の普遍性を権威づける行為があったことを論じた。

第九章「学徒兵の読書を描く ―阿川弘之『雲の墓標』論―」では阿川弘之『雲の墓標』『新潮』、一九五五年一月号～一二月号）に描かれた学徒兵の読書行為について考察している。『雲の墓標』は、『きけわだつみのこえ』などの学徒兵遺稿集によって、反戦の象徴としての学徒兵イメージが広く流通する事態に対する反発の試みとして執筆が行われ、懊悩しつつも日本主義的な傾向へと接近していく学徒兵の姿を描いた点が評価されてきた。こうした『雲の墓標』と同様の視点からまとめられた遺稿集に、『雲ながるる果てに』（一九五二年）があるが、第九章では『雲の墓標』に描かれた読書行為と、『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに』などの学徒兵遺稿集から読み取れる読書行為との比較を行っている。『雲の墓標』における学徒兵の読書行為は、これら学徒兵遺稿集によって作られた学徒兵の読書行為イメージを逸脱するものであり、戦後における固定化された学徒兵の読書イ

メージに対する批判として読むことが可能である。

終章「本研究の成果と課題」では、これまでの議論を振り返りながら、戦場の〈読書空間〉において「学徒兵という読者」を考察するうえでみつけた課題と、さらに将兵という読者を今後研究していくための課題について述べている。第一部では、戦場という〈読書空間〉が、戦場への書物の流通やそれに伴う新たな兵士用の慰問雑誌の制作、慰問書籍を戦地へと送る活動によって支えられ、形作られていったことを明らかにしてきた。戦場で読書が可能となる背景には、兵士の教育という目的があり、なかでもリテラシーの高い兵士の意識を戦争に動員するためのメディアとしての役割がある。そしてこうした兵士を動員するメディアとしての役割は、強制的なものではなく、緩やかに統制を行っていくところに特徴があったと言える。第二部では、こうした戦場での〈読書空間〉を成立させるための、戦時下の内地における読書統制の様子を、推薦図書制度に注目するかたちで論じた。そして第三部では、第一部、第二部を通じて明らかにしてきた、戦場の〈読書空間〉において行われていた様々な読書行為が、戦後に反戦的態度としてみなされる歴史的な理由を、戦後の読書ブームとの関わりから明らかにした。

3 総評

本論文は、戦時期の読書行為について、特に学徒兵や当時の青年の読書環境に焦点をあて、詳細な資料による裏づけを行いつつ解明していった研究として十分に評価できる。特に、学徒兵や戦地における読書行為は、資料的な制約もあってこれまでほとんど明らかにされてはいない。それゆえ、学徒兵の読書は、戦争に非協力的なイメージとして典型化、固定化されてしまう傾向にあった。本研究では、そうした典型的なイメージを豊富な事例を通して覆している。そしてまた、戦場であっても、将兵には多様なルートによって書物が流通していたことを解明していった功績は大きい。

すでに本論文の一部は、複数の学術雑誌に公開されており、その成果は日本文学研究の領域でも高い評価を得ているが、出版史や教育史を含めた広い領域からも関心を向けられている。読書行為の歴史を明らかにしていくうえでの方法や、そのために収集、活用していくべき資料について、一つの試行的なモデルを提案としている点も評価していくことができよう。

本論文の特徴は、読書行為を分析するにあたって、それをいくつかのプロセスにおいて考察の対象としている点にあった。第一に、書物が戦地にたどりつく具体的なプロセスについての分析、第二に、戦地で読まれた書物や、戦時期の推薦図書制度を通してなされる将兵の読書をめぐる分析、第三に、戦後、学徒兵の読書イメージが典型化されて受容されていくプロセスについての分析である。

このそれぞれのプロセスにおいて、豊富な資料に基づく具体的な知見が得られたことは、評価しておく必要がある。そうした中では、ほとんど解明されていなかった兵士の慰問の

ための出版物、慰問出版文化についての調査は、今後、その具体的な内容についての分析も含めて、進展が期待される部分でもある。

とはいえ、この時期の読書行為を解明していくうえでは、これら遺された資料の入手がきわめて難しいという資料的な制約が常に伴う。そうした制約を克服していくうえで、本研究において示された分析手法の可能性が注目される。戦時期の推薦図書をめぐる運動を通して、学徒兵の読書への影響をとらえていく手法はその一例である。また、戦場に供給される書物の流れを俯瞰的にとらえる手法をとる一方で、一人の学徒兵に焦点をあてて、その蔵書や読書記録を分析することで、重層的なアプローチを試みてもいる。

戦場での読書行為を明らかにしていく本研究は、文学作品についてのアプローチにおいてもユニークな視点を提供し得ている。学徒兵を描く文学作品や、戦時期に読み、書く青年像を描いた作品は数多い。だが、これまでは戦時期の読書自体が明らかになっていなかったため、それら描かれた読書と、当時の読書との差異や関係を十分に問題化することができなかった。本論文は、まさにそうした点に注目することで、学徒兵の読書や戦死者の遺稿集を編むという営為を相対化し、意識化させる小説の手法を析出している。また、学徒兵の読書のイメージが、戦後典型化され享受されていくプロセスと、戦後の堀辰雄作品の流行、読者の享受を並行して論じることで、両者の影響関係を明らかにしていくことも可能となっている。

本研究の意義や成果については評価できるが、一方で取り組んでいくべき課題や残された問題点についても審査の中で指摘がなされた。本研究の調査は戦場での読書行為というよりも、より広く戦時期の読書行為を包含しており、主たるタイトルとややずれる点、あわせて、戦場という用語でどこまでを指すか、確定することが困難な点が指摘された。場所や時期、軍内部の組織間の読書行為の違いをも明らかにしていく必要がある。

また、調査にかけられた労力や見だし得た資料、事実は評価できるものの、一方で明らかにできなかった部分、見だし得なかった資料等、今回の研究の空白部分も意識化し、体系的に今後アプローチしていく必要性についても指摘がなされた。

さらには、戦場という場に焦点をあて、学徒兵という読者に目を向ける意義を、論者の中で今一度深化させ、向き合ってほしいという指摘、それぞれの作家や作品分析に、より踏み込んだ考察を行っていく余地がまだまだある点等も課題となった。とはいえ、これらは本研究が今後発展、展開していくべき豊かな可能性を視野にいれての意見であり、研究の成果としては十分な評価に値するものといえる。

以上により、審査員一同の総合的な判断の結果、本論文が「博士（学術）」を授与するに十分に値するものであるとの結論に達したので、ここに報告する。